

# 公立文化施設（ホール）の役割と現在

一般財団法人 地域創造 プロデューサー 児玉 真

## 1. 地域創造の目的と事業

まず、地域創造という財団から話し始めたい。地域創造は自治体が設置した文化施設を支援するため、全国の自治体が集まって1994年に設立した総務省管轄の財団法人である。

1980年代以降、ものの豊かさから心の豊かさへのシフトチェンジが進んだ国の方針に対応して全国に作られた文化施設だが、運営の人材育成への対応の遅れを何とかしたいという意図からできた団体である。その目的は以下のようなことだった。

- ・地域の文化芸術を担う人材（特に会館職員）の育成
- ・文化施設の利活用の促進
- ・地域において活動が期待されるアーティストの確保
- ・地方が単独で実施困難な事業の連携の手助け
- ・文化芸術活動による地域作りのための調査研究

会館職員向けの研修事業は大きな柱となっていて毎年2回、少人数でワークショップ型の研修が行われている。30年継続してきた意味は大きく、多くの有能な会館職員が育ってきている。いまや、かつて民間にしかなかった高度な事業制作手法を持ち、芸術創造活動もできる組織も生まれてきている。昔、会館に異動になった人が「私は文化芸術には疎くてわからないので」と堂々と言っているのを聞いて、ほかの部署に異動したときにはそうはいわないだろうなあ、と思っていたことを思い出すと隔世の感がある。

1998年から始めた公共ホール音楽活性化事業は、地域創造がその手法を積極的に地域の会館に働きかけてきた事業である。公共ホールを拠点として音楽家を地域に短期滞在してもらい、アウトリーチなどで学校やコミュニティと交流するレジデンシーの考え方を取り入れたプログラムである。今は各ジャンルで行われているが、はじめに手をつけたのが音楽だった。私が関わり始めたのもこの頃からである。

当時、各地の人材を中央の音楽大学などで演奏者として育成する仕組みができていたが、彼らが地域に戻ってから活動する場が見いだせない状況が大きな悩みであった。本当は地域に愛情と厳しさを併せもつ客を育てることが一番だがそれは簡単ではない。何ができるかわからないけれど、ホールも演奏家も地域社会とどう関わっていくかを一緒に考えよう、というのが始まりだった。

アウトリーチをベースとしたこの活動を始めて4、5年経過して気がついたことは、まずそんなに簡単にホールの客が増えるものではない、ということ。もう一つは、実は良い音楽を必要としている人はコミュニティの中に多くいる、ということ。それ故、演劇やダンスを含めてこの活性化事業はずっと続いている。

## 2, 各地の公共ホールが果たすべき社会的役割の拡大

第2次大戦後の公共ホールの歴史と役割を少したどってみたい

・はじめは、人が集まる場所の必要性から各地に会場が作られた。公会堂という名称はそれ故だと思いが演劇などの公演や音楽のコンサートなども行われていた

・その後、市民活動が盛んになり、それを支える場所が必要になった。市民活動の受け皿として、また、市民鑑賞団体やマスコミの事業の公演場所として各地に市民会館が作られていった。

・しかし、1980年代になると、文化の時代というかけ声とは裏腹に、そこまで市民生活に音楽が浸透しているとは言えないことがわかってくる。地方都市では、公演の集客に苦勞し、民間の主催者は大都市以外では公演事業ができないため、小さな市町村の会館は稼働率の低さも問題になってきた。それと同時に、民間コンサートホールを中心に「ホールは自主的に発信するべきものだ」という意識が高まり、民間のホールなどで事業のノウハウが大きく進歩した時代でもある。公共ホールも自主事業や普及事業を積極的に行う機運がでてきた。

・1990年代は公共ホール建設のピークで1000近くの会館が開館する。また、民間のホールの企画制作力が先行していて、公共ホールはそれを学んでいこうという姿勢が大きかったと思われる。とはいえ、水戸芸術館などを先頭に創造活動を行う会館がいくつも現れた時代でもある。

・2000年代になると、公共ホールはコンサートや普及を行うだけでなくコミュニティと音楽を結びつけていく役割を持つという意識が強くなる。アウトリーチ活動が瞬く間に広まったのもそのためだと思う。一方、目に見える効果がすぐには顕れない事業の実施には説明責任が必要でもあり、担当者の頭を悩ませることにもなった。民間でもサントリーホールの子どもへの普及事業「Enjoy Music」や、第一生命ホールの行う地域へのアウトリーチ事業など、企業文化の考え方も変化していった。

・東日本大震災は公共ホールの考え方にも大きな影響を与えた。東北では地域コミュニティが甚大な影響を受けて祭りができなくなる、という地域課題も多く見られるようになった。そのため、ホールも文化芸術によるコモンズ形成はかるプラットフォームとしての役割が求められるようになったといえるだろう。

上記のように、公共ホールの役割は時代とともに（特にここ25年くらい）大きく変わってきた。同時に芸術が扱う役割や社会的機能の範囲も拡大して認識され、今やホールという組織は芸術と社会を結ぶ機能集団であることが求められている。それに見合うだけの予算と人材配置がされているかという、大いに心許ないのだが・・・

## 3, いくつかの地域の会館の事例

私がホールの企画に関わって事業を推進してきた場所はいくつもあるが、一緒に会館の人たちと仕事をし印象に残ったいくつかの事例を紹介したい。それぞれ個性もあるが、地域との関係性を大事にして活動を続けてきた会館だと思う。

### A) いわき芸術文化交流館アリオス（直営）

アリオスは2008年に開館したいわき市の総合文化センター。オープン前から9年間チーフプロデ

ユーザーとして関わった。いわきは東京 23 区に比する広大な市で、その中央にアリオスができたことを周辺部の人たちに生活感として実感してもらうかが引き受けた当初からの課題だった。

アリオスでは開館当初から、ホールで行うコンサート企画とともに、コミュニティ担当を置き、市内全域や周辺の商店街などを訪ねて可能性を探りつつアーティストを派遣する企画を実施してきた。東日本大震災のあともコミュニティを訪ね話をきくことから始めた。また、市民の思いを聞くミーティング（もやもや会議※）をしながら、震災後のホールの有りようを探ってきた。また、年に一回、NHK 交響楽団の定期公演を招聘しアウトリーチもしてもらうようにした。最近では「NHK 交響楽団のアンバサダー」を楽団員から指名し（昨年は Vn の三又治彦さん、今年は Fl の梶川真歩さん）、定期公演の前に何回もいわきを訪ねてもらい、市内の各所で小さなコンサートや交流などを行っているようだ。これはメンバーにもいわきの良さを知ってもらうきっかけになっていると思う。

※もやもや会議＝震災後、市民に集まってもらって、テーマごとに「もやもやしていること」をそのまま語ってもらう、というゆるいワークショップ。そこから市民主導の企画がいくつか生まれた。

#### B) 北上市文化創造（財団）

会館内のオープンスペースを高校生などに学習の場所として解放することで、昼間でもいつも人がいる活気ある空間になっている。この管理姿勢は今や各地のホールで行われていることだが、北上が全国でも初めてかもしれない。また、地域創造の音楽活性化事業でアウトリーチ手法を試したあと、10 年ほど前から地域の 3 館が連携し、いわての音楽家を公募し、研修をしたうえで市内各地に派遣しつつ育成する事業を展開している。この事業では、立ち上げから演奏家のオーディションから研修などでほぼ毎年付き合ってきているが、担当者が「ここには市内の様々な問題を自分たちと共有し、その解決のために一緒に知恵を絞ってくれるアーティストがいることが一番の財産」と発言しているように地域演奏家との関係づくりが上手くいっている会館のひとつであろう。

#### C) 熊本県立劇場（財団）

開館当初から、初代の館長である鈴木健二氏が県内のあらゆる文化的な資源を見て回るなど、市町村の会館やコミュニティとの関係を作ってきた。清和文楽への支援などはその成果のひとつ。そのような県の役割意識の発想は今も引き継がれていて、市町村会館にとって面倒見の良い県の会館といえるだろう。ここは開館以来、研修やアウトリーチ事業のアドバイザーとして継続的にお付き合いしてきたが、アウトリーチ手法を活用した事業では、県立劇場が音楽家を育てて市町村の会館とタイアップして派遣する、という方法がとられている。今年は 90 回ほどのアウトリーチを予定しているという。

## 4. 新型コロナがもたらしたこと

・新型コロナによる文化施設の影響と状況（特にコミュニティ活動について）

2020 年の極端とも思える反応から最近では冷静に落としどころを探るような動きになり、会館での公演が問題なく実施ができるようになってきた。その間、クラシック事業協会や公文協などが作ったガイド

ラインが安心感に一役買っていた。しかしまだ慎重になる気持ちはあるようで、いまだに公演への集客などがやや低調であることは否めない。特に公共ホールが主催する地味な音楽企画はまだ以前のようにはなっていない、と話すホールが多い。

コミュニティでのアウトリーチ事業では、実施に当たって、距離の近さ、広くない空間、長すぎない時間、会話の重要さなど、ある意味「3密」を推奨してきたこともあって時間がかかったが、こういうときこそコミュニティで活動すべきだという意識はアーティストにもホールにもあり、距離をとったり、パーティーを使ったり、リモートのアウトリーチまで行いつつ様々な工夫をしてきた。新しい発見もあったがやはり隔靴搔痒の感があったようだ。

今年度は、コンサートもコミュニティプログラムもほぼ通常通り行われるようになった。地域創造で助成をしている事業についても、ほぼ計画通りに事業が行われているようである。また、コミュニケーション力の不足、やその機会減少が心配される社会状況から、会館主催事業では、音楽でも鑑賞型のものよりもアウトリーチやワークショップへの興味が広がっているのではないかと感じる人が多い。会館でのコンサートについては、早い時期から告知をして広い範囲から客をホールに集める、という大規模な企画よりも、地域住民との関係を維持しつつ、ターゲットを明確にした企画を数多くやっていった方が良い時代になったのではないかと（採算の問題はあるけれども）という声も聴くようになった。

#### ・今思っていること

新型コロナの影響は、そもそも現代において進んできた人間の孤立化が一層進んだのではないかと、とも言えるが、一方、コミュニケーションというものについて考え直す良い機会になっているとも思う。

宗教家でもある積徳宗さんは「書き換えが利き消費される『情報』と、出会ってしまうと無視できなくなる『物語』は違う。現代は情報を扱うスキルは発達しているが、物語に身を委ねる能力が低下しているのではないかと」言っている。情報では救われないのである。

もう一つ、共感感情を含めたコミュニケーションだが、共感の研究である東北大学の川島先生の実験では、グループでの会話で共感があると参加者全員の脳の同じ部分が活発化する、という。しかし、コロナを経験した最近の実験によると、グループで同じような話をして対面だと起こる脳の活発化がリモートでの会話ではほとんど起こらなかったという。会社の会議などでもそれは思い当たる節がある。情報の共有は出来ても感情の共有はほとんどできていないのでなかなか実践に結びつかないのだ。

最近のアメリカでは社会的情動的な学習 (SEL) によるエモーショナルな知性 (EQ) の開発が注目されている。要は感情をコントロールする能力が大事なのだ。いま、私たちは情報量の拡大によって、じっくり考える余裕が無くなり、日常的・表面的な知識だけで行動の決断をしている。それは、能率は良いかもしれないが、孤独を助長する方法になっている。

最後に、他人との対話は大事だが、自分との対話というのも大事である。これがないとコミュニケーションが単なる技術になってしまう。そのなかで、音楽（特に生演奏）は、感情に対する働きかけの力が大きいジャンルであり、それが自分との対話を助長する。コロナ後の時代だからこそ充実させていかなくてはならないのだ、と感じている。